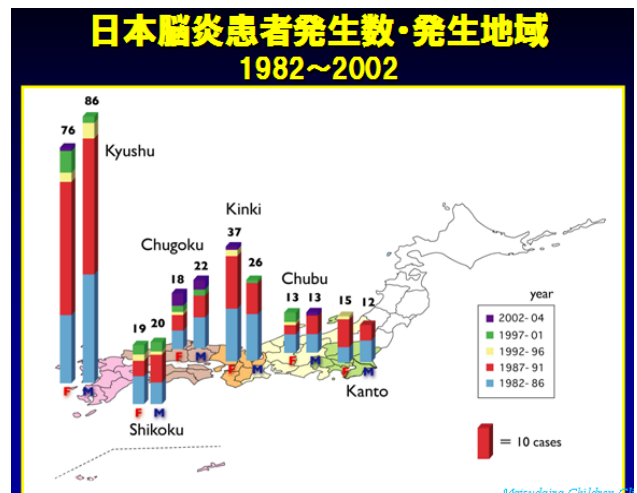
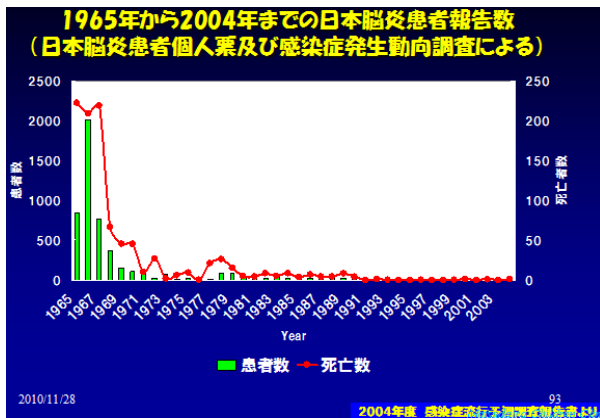
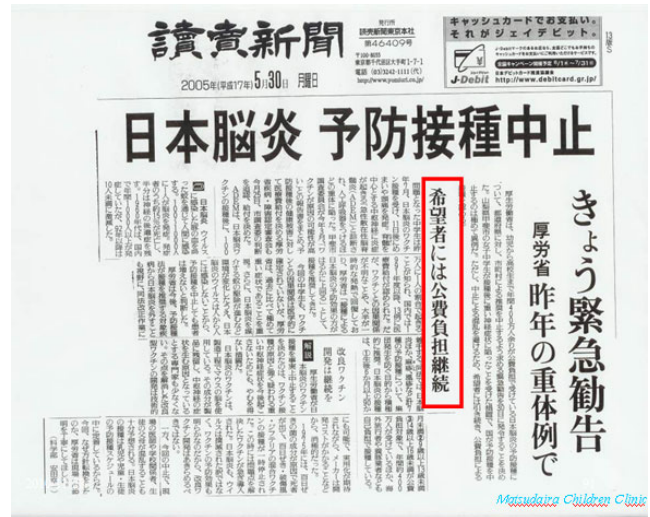


それから、日本脳炎ですね。日本脳炎も決して忘れられた病気ではありません。日本脳炎は、平成17年から一時、予防接種が強制的な勧奨制度でなくなりましたので、日本脳炎の予防接種をしていない方が増えてまいりました。一度日本で流行するとかなり問題になるとお思いますので、平成22年の4月からまた再開されておりますので、母子健康手帳を見ていただいて、日本脳炎ワクチンが十分されていないお子さんは、ぜひかかりつけ医と相談してください。日本脳炎もまだまだ、先ほどの麻疹と同じですけれども、東南アジア中心にして流行しております。

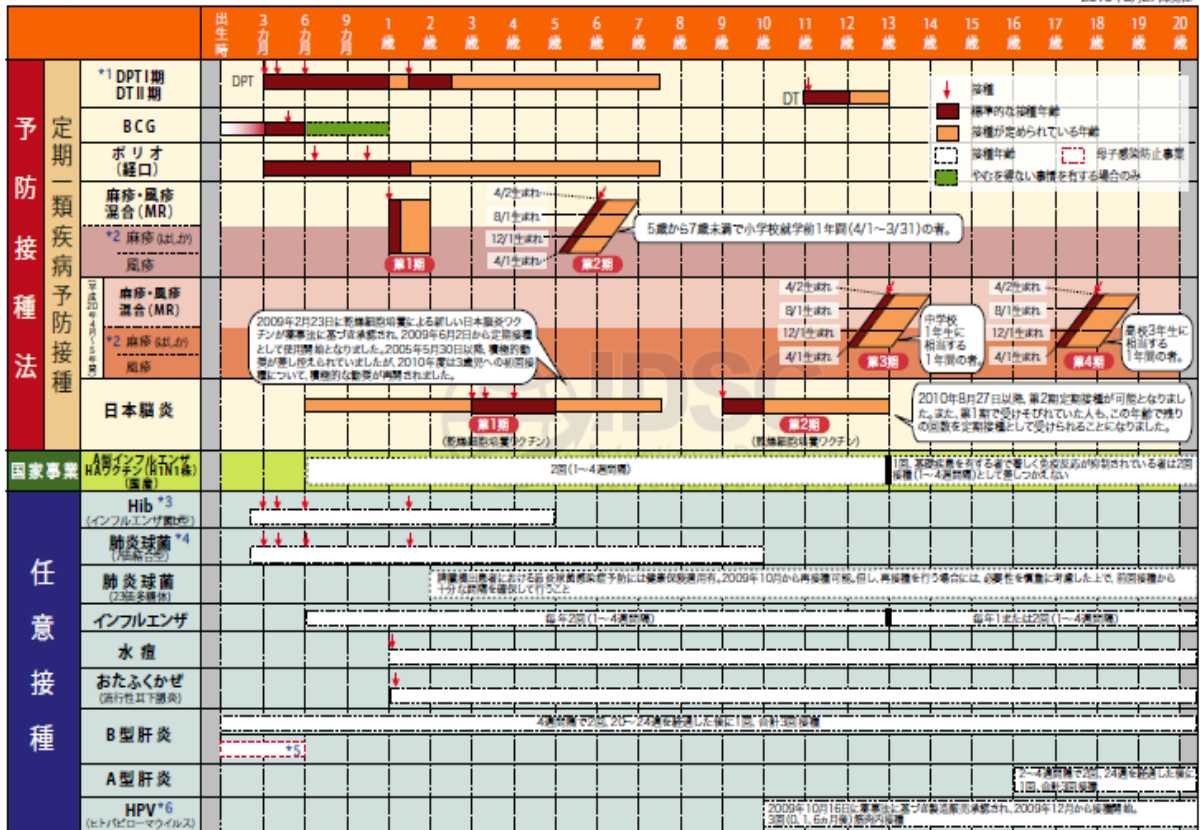


ワクチンがあると防げる病気はたくさんあるのですね。

## 予防接種で防ぐことが可能な病気 任意の予防接種

任意予防接種	
水痘(みずぼうそう)	発熱に前後して小さな水ぶくれが全身に出る。かゆみが強く、回復に1週間から10日くらいかかります。感染力は強く、せきやくしゃみによる飛沫感染と、水泡から出てきたウイルスに触れる接触感染でうつる。潜伏期間は11から20日。感染する期間は、発疹の出る1～2日前から水泡が全部かわいてかさぶたになるまで。
流行性耳下腺炎(おたふくかぜ)	耳下腺や顎下腺が腫れて痛み。高熱やけいれんを伴う「無菌性髄膜炎」を起こすことがしばしばあり、難聴の原因としても知られている。 潜伏期間は14～24日間。感染しやすい時期は、耳下腺がはれる数日前から発病後1週間ほど。
B型肝炎	B型肝炎ウイルスの持ち主であるキャリアの母親から生まれてくる赤ちゃんに感染する可能性は高く、ガンマグロブリンという注射とワクチンの接種を行う。
インフルエンザ	毎年11月～3月に流行し、高熱、鼻水、せき、節々の痛み、頭痛などの症状が急に起こる。また国内で急性脳症を起こす子どもが年間100～400人ほどいると考えられている。潜伏期間は1～2日間。

まず、このみずぼうもそうです。みずぼうそうも決して軽い病気ではありません。おたふくもそうですね。おたふくも普通にかかりますと、40度が1週間ぐらい続く怖い病気ですから、ぜひワクチンをしてください。インフルエンザもそうです。第一三共さんの資料の中にこの図が出ておりますけれども、最近では、予防接種のスケジュールが生まれて2カ月から始まるようになりました。赤ちゃんが生まれて2カ月になりましたら、かかりつけ医に行ってください、まず予防接種の相談をしてください。そして何をやるかといいますと、最近始まってまいりました、まだ定期接種にはなっておりませんが、ヒブワクチンと肺炎球菌ワクチンです。これを生後2カ月からやっていただきます。それから1カ月しまして3カ月になりましたら、定期接種のDPTワクチンが始まります。我々小児科のところは、同じ日に3回注射させていただきます。3カ月になりましたら、DPTワクチンを左の肩に打って、今度はひじに肺炎球菌ワクチンを打って、右にヒブワクチンを打つということで、赤ちゃんにとって非常に残酷ですけれども、現に肺炎球菌ワクチン、それからヒブワクチンをしないために、子供が今でも何十人、何百人と死んでおるのが日本の現状ですから、生まれて2カ月になったら、ぜひかかりつけ医で予防接種の相談をしていただきたいと思います。

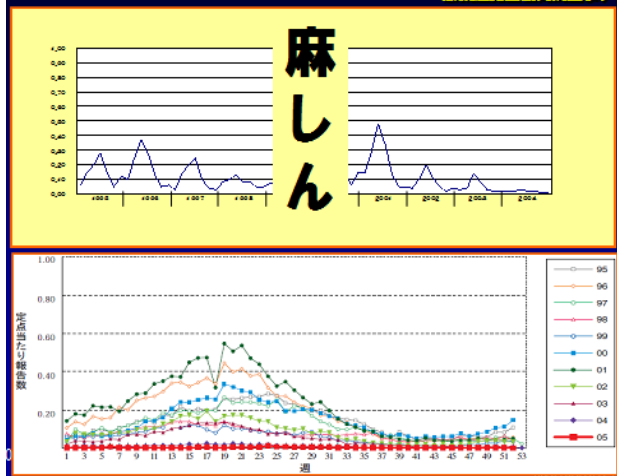


\*1: ジフテリア、百日咳、破傷風を意味する。  
 \*2: 原則としてMRワクチンを接種。なお、同じ期内で麻疹ワクチンまたは風疹ワクチンのいずれか一方を受けた者、あるいは特に麻疹ワクチンの接種を希望する者は麻疹ワクチンを接種。  
 \*3: 2008年12月19日から国内での接種開始。生後2か月以上3歳未満の間にある者に行うが、標準として生後2か月以上7か月未満で接種を開始すること。接種方法は、通常、4~6週間の間隔で3回皮下接種（医師が必要と認めた場合には3週間間隔で接種可能）、3回目の接種後おおむね1年の間隔をおいて、1回皮下接種。接種開始が生後7か月以上12か月未満の場合は、通常、4~6週間の間隔で2回皮下接種（医師が必要と認めた場合には3週間間隔で接種可能）、2回目の接種後おおむね1年の間隔をおいて、1回皮下接種。接種開始が生後13歳未満の場合は、通常、1回皮下接種。  
 \*4: 2009年10月16日に審議に基づき導入を決定された。2010年2月24日から国内での接種開始。生後2か月以上7か月未満で開始し、27日間以上の間隔で3回接種。追加接種は通常、生後12~15か月に1回接種。接種もれ者には、次のようなスケジュールで接種。生後7か月以上12か月未満の場合：27日以上の間隔で2回接種したのち、60日以上あけて追加接種を1回接種。1歳、60日以上あけて2回接種。2歳以上9歳以下：1回接種。  
 \*5: 妊娠中に検査を行い、HBs抗原陽性（HBs抗原陽性、産性の両方とも）の母親からの出生児は、出生後できるだけ早く及び、生後2か月にHBs抗体グロブリン（HBIG）を接種。ただし、HBs抗原陽性の母親から生まれた児の場合は2回目のHBIGを省略しても良い。更に生後2.5か月後にHBIGを接種する。生後6か月後にHBs抗原及び抗体検査を行い、必要に応じて任意の追加接種を行う（健康保険適用）。  
 \*6: HPV16型・18型（子宮頸癌予防）、日本産科婦人科学会、日本小児科学会、日本婦人科産科学会連名の「ヒトパピローマウイルス（HPV）ワクチン接種の普及に関するステートメント」平成21年10月16日付によると、推奨される年齢は、以下の通りとなっています。【優先的接種推奨年齢：11~14歳の女子、11~14歳で受けることができなかった場合の接種推奨年齢：15歳~45歳の女性。】  
 © Copyright 2010 IDSC All Rights Reserved. 無断転載・改題を禁じます。

麻疹もまだまだ出てまいります。

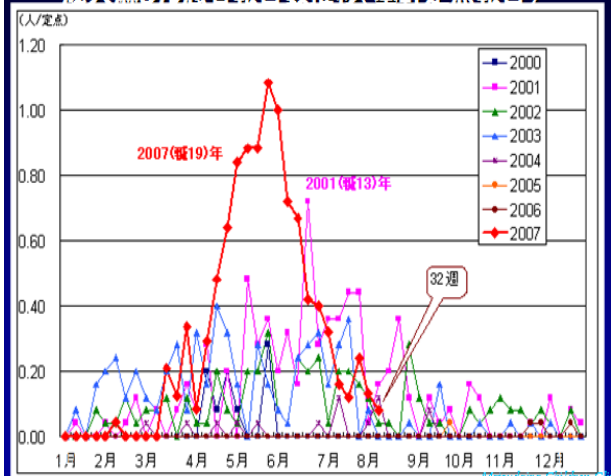
### 麻疹発生状況(1)

感染症発生動向調査より

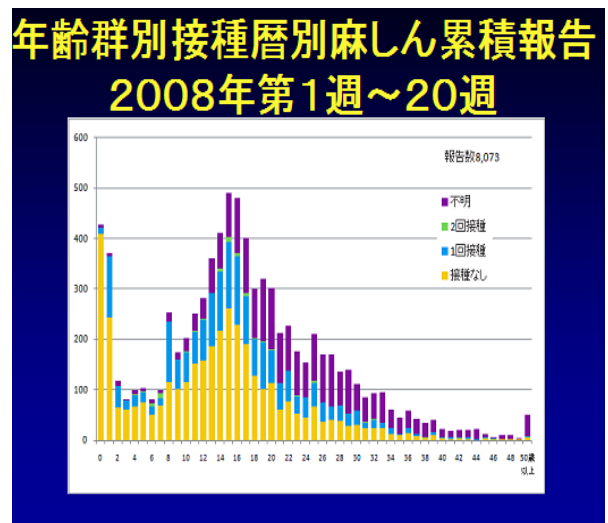
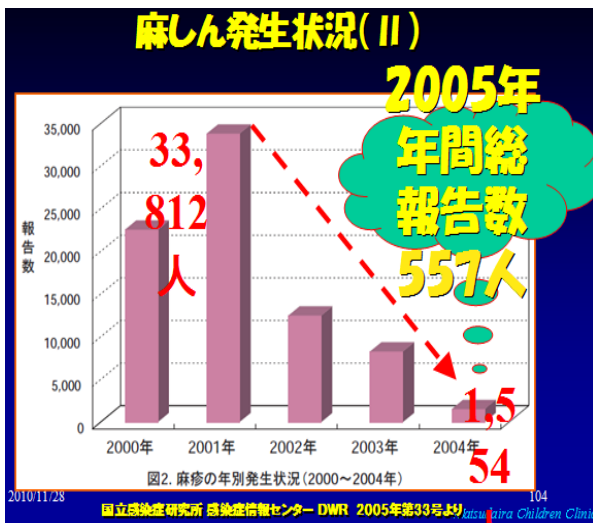


### 東京都感染症週報

成人麻疹患者報告数推移(基幹定点報告)







読売新聞 2005年(平成17年)11月4日 第18964号

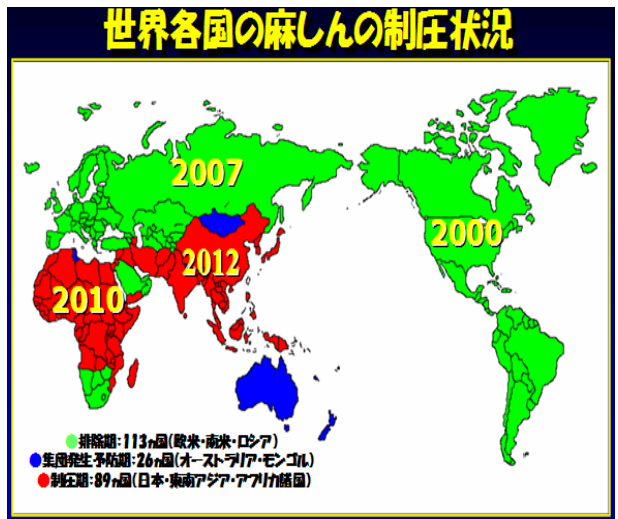
## 「1歳児にワクチン」奏功 制は圧しか

### 3万人▶500人 患者激減

は、この年間患者報告数

2000年 812人  
2001年 33,000人  
2002年 14,000人  
2003年 10,000人  
2004年 1,500人

2005年 557人



### 予防接種法施行令の一部を改正する政令 (政令第35号)(厚生労働省)

◆平成20年4月1日から平成25年3月31日までの間、麻疹及び風しんの定期的予防接種の対象者に**中学1年生相当の者(13歳となる日の属する年度の初日から当該年度の末日までの間にある者)**及び**高校3年生相当の者(18歳となる日の属する年度の初日から当該年度の末日までの間にある者)**を追加することとした。

**第1期**

生後12月から生後24月に至るまでの間にある者

**第2期**

5歳以上7歳未満の者であって、小学校就学の始期に達する日1年前の日

+

**第3期**

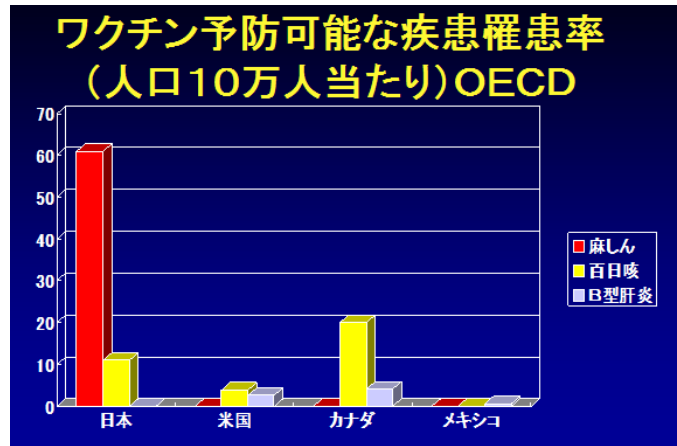
13歳となる日の属する年度の初日から当該年度の末日までの間にある者

**第4期**

18歳となる日の属する年度の初日から当該年度の末日までの間にある者

宣言告示(2008年2月27日)

2歳児における基本的予防接種率、OECDのものが出ていますけれども、日本は、はしか、風疹、DPTを比べますと、ほかの国に比べて予防接種率が低いのですね。日本のお父さん、お母さん方は、先ほどもお話が出ましたけれども、子供は健康に育って当たり前だと思っているのですね。それは大きな間違いで、感染症を予防するため



には、今も昔もワクチンをしなければなりません。ワクチンをしないで子供がはしかにかかっているのも、世界で日本が一番多いのです。

もう一つは、日本のワクチン行政が遅れておまして、アメリカでこれだけやられている予防接種が、日本では非常に空欄の状態です。アメリカでたくさんやられておりますけれども、まだまだ日本は承認されていない、また承認されても定期接種化されていないものがたくさんあります。

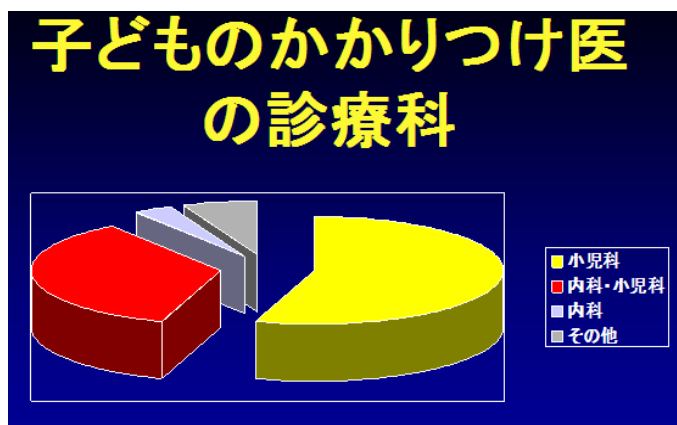
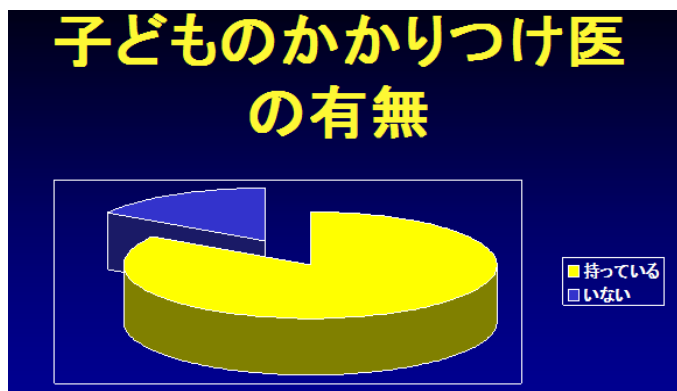
年	日本	米国
1985	B型肝炎ワクチン(米国は1982)	
1987	水痘生ワクチン	Hibワクチン, IPVワクチン
1988	肺炎球菌ワクチン(米国は1977) 遺伝子組換えB型肝炎ワクチン MMRワクチン(米国は1971)	
1991		aPワクチン(日本から導入。日本は1981)
1992		DTaPワクチン 日本脳炎ワクチン(日本から導入。日本は1976)
1993		DTaP-Hib
1994		ペストワクチン
1995	不活化A型肝炎ワクチン	水痘生ワクチン(日本から技術導入)
1996		Hib-B型肝炎ワクチン, 不活化A型肝炎ワクチン
2000		7価肺炎球菌ワクチン
2001		A型-B型肝炎ワクチン
2002		DPT-IPV-B型肝炎ワクチン
2003		経鼻インフルエンザ生ワクチン, DPTワクチン(成人用)
2005	MRワクチン	MMR-水痘ワクチン, 髄膜炎菌ワクチン(結合ワクチン)
2006		ロタウイルスワクチン

ワクチン種類ビジョンより

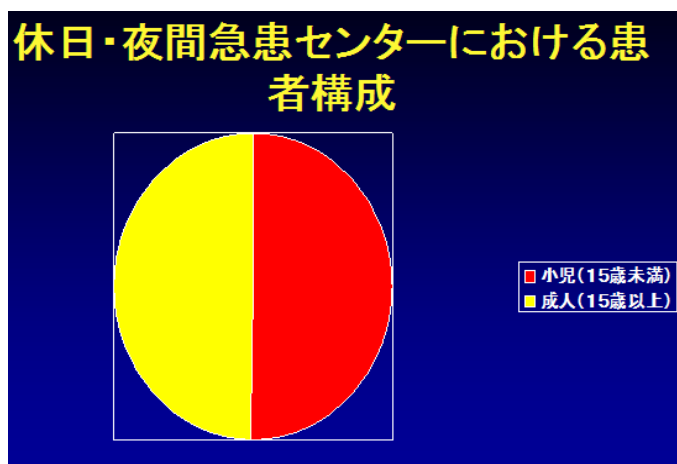
米国で承認されているが日本では承認されていないワクチン	日本で承認されているが定期接種ではないワクチン
<ul style="list-style-type: none"> <li>◆ IPV</li> <li>◆ DTaP+IPV</li> <li>◆ DTaP+HB+IPV</li> <li>◆ 肺炎球菌</li> <li>◆ A型+B型肝炎</li> <li>◆ MMR</li> <li>◆ MMRV</li> <li>◆ 髄膜炎</li> <li>◆ DPT(成人用)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>◆ A型肝炎</li> <li>◆ B型肝炎</li> <li>◆ 水痘</li> <li>◆ 流行性耳下腺炎(おたふくかぜ)</li> <li>◆ 肺炎球菌(高齢者)</li> <li>◆ Hib</li> </ul>

平成18年 日本製薬団体連合会調べ(一部改変)

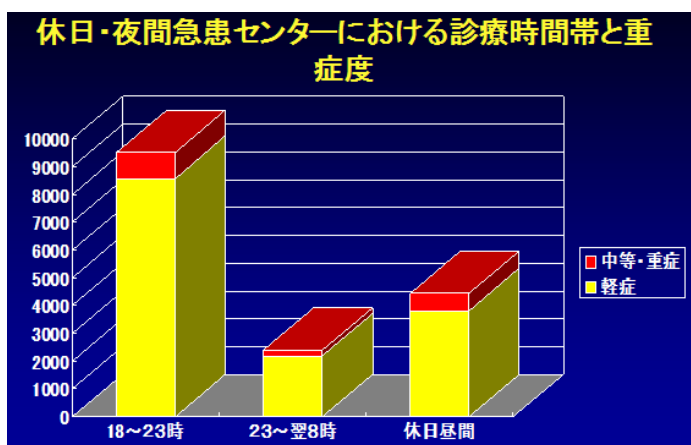
さあ、最後のお話になりますけれども、子供のかかりつけ医、お母さん方に問うてみますと、大体8割ぐらいの方がかかりつけ医を持っていらっしゃると思います。その中で7割ぐらいは、小児科専門医のかかりつけを持っていただいております。



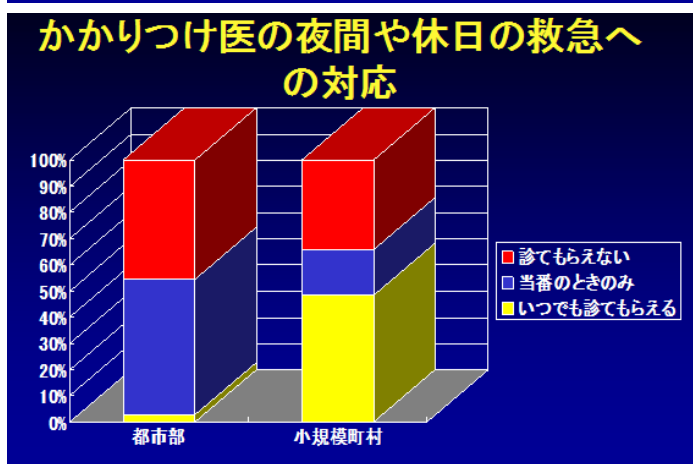
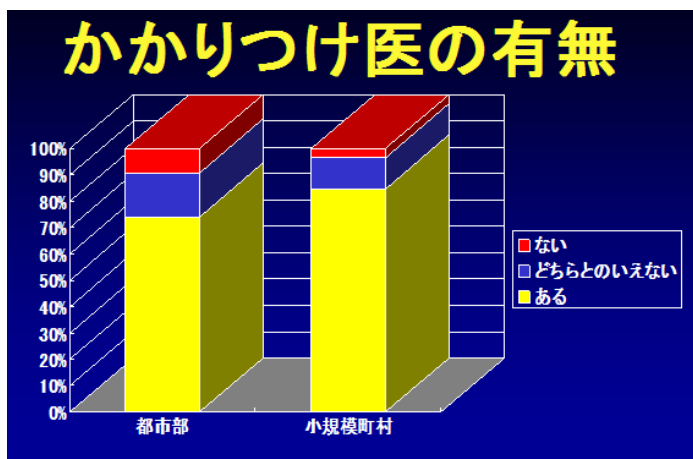
しかし、先ほどもちょっと出ましたけれども、休日・夜間急患センターに行かれる方は、半分ぐらいは子供です。これはどこの救急外来をみても半分は15歳以下の子供でございます。



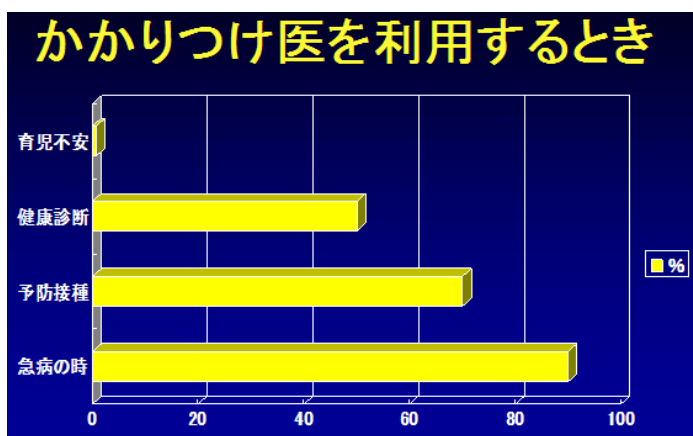
休日・夜間急患センターにおける診療時間帯を見ますと、やはり準夜帯が多いですけれども、準夜帯、深夜帯、それから休日含めまして、この黄色いところは軽症です。ほとんどの方が軽症ですね。



それから、かかりつけ医はあっても、なかなか、かかりつけ医が夜診してくれない。先ほどもお話が出ましたけれども、全くそのとおりでございます。向かって左側が、都市部の小児科の開業医です。診療時間外に診ている黄色のところは、本当にもう数%です。まだ小規模の市町村のかかりつけ医は、結構時間外に診ていますけれども、我々ほんと都市部の開業医は反省しなければいけないと思います。



お父さん、お母さんがかかりつけ医を利用する理由としては、本来は健康診断であったり予防注射であったり育児不安が主なのですけれども、我々は、どうしてもまだまだ感染症を中心にして診療してしまうところに、お父さん、お母さんの要求のギャップがあると思います。





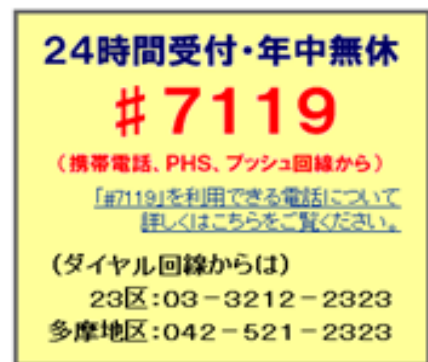
子供の救急ホームページもあります。それから東京都医師会の中のホームページを見ていただきますと、予防接種のところも入ってございます。それから、「ひまわり」ですね。それから、先ほども出ました#7119ですね。



救急車を呼んだほうがいいのかな？  
迷ったら救急相談センターへ

**救急相談センター**

平成19年6月1日(金)9時スタート





最後のまとめになります。後でまたご質問も受けておりますからお答えしようと思えますけれども、どんなときに子供が救急にかからなくてはいけなから、また救急車を呼ぶ必要があるかどうか、そのお話を最後にさせていただきたいと思えます。

まず一番目。38度以上の熱が4日以上続くととき。逆に

言うと、熱がすぐ出たときに救急外来に行かないでください。熱が夜出て、すぐに救急外来に行く必要は全くないと思えます。それから、吐いてぐったりするとき、10分以上のけいれんを起こすとき、それから、繰り返すけいれん、それから半日以上水分が全くとれない、意識が混濁する、血便、それから生後3カ月未満の高熱は、その日でもいいですから救急外来に行ってくださいいいと思えます。

私も今救急外来をやっていますけれども、半分以上は発熱で来られるのですね。しかも、熱が出たその日に参ります。ですから、来られても全く何も処置がありませんので、ぜひ子供さんを持たれて、かかりつけ医と相談して、発熱の時に使うことができる解熱剤を緊急薬として保存しておくことをお勧めします。解熱剤は、年齢や体重によって量や使用法が異なりますので、普段からかかりつけ医と相談しておくことが大切です。解熱剤を使う基準は、体温が38.5度以上でしかも機嫌が悪い時であります。解熱剤を使っても平熱まで下がることはまずありません。せいぜい体温を1度位下げる位で、しかもその効果は4時間から6時間位です。それでも子供は少し楽になります。何回も繰り返しますけれども、高熱が出てすぐに病院に行っても何もなりませんので、お熱が出たら、まずおうちで様子を見て、機嫌が悪くなったら坐薬を使って、次の日のかかりつけ医の受診で十分対応できると思えます。

先ほどらい、急性感染症のお話をしましたけれども、風邪を中心にして子供は熱を出しますと、大体3日間は高熱が出るということは当たり前だと思ってください。38度だから軽い、40度だから病気が重いということもないと思えます。子供の熱をはかってみますと大体40度になりますから、40度の熱にも慌てずに、1日目であって元気であれば、おうちで解熱剤を使って対応していただければいいと思えます。これだけ理解していただければ、多分、夜の救急外来の2割、3割、4割は減るのではないかと思っております。

足りないところは、資料と、それから後でご質問にお答えしようと思えます。どうもご清聴ありがとうございました。

## 救急にかかるとき

- ・ 38度以上の熱が4日間以上
- ・ 吐いてぐったり
- ・ 10分以上の痙攣
- ・ 繰り返す痙攣
- ・ 半日以上水分が摂れない
- ・ 意識が混濁
- ・ 血便
- ・ 生後3か月未満の発熱